

誰もが、心の中に「マティスの卵」を持っていたら

わたせ せいぞう
(漫画家・イラストレーター)

中原 悦夫
(日本アンチエイジング歯科学会編集委員長)

- 日時：2011年7月9日(土)
- 場所：クリニック デュボワ



(右：わたせ氏、左：中原)

美しさを表現する最大の秘訣は対象の徹底した観察

中原 審美やアンチエイジングをやっている人間として、美や芸術について全般的に学ぶところが多いわけですが、私が今回、ぜひわたせさんに伺いたいと思ったのは、わたせさんの漫画なりイラストでも、非常にシンプルなタッチでありながら、極めて繊細な表現が込められている、その秘訣がどこにあるか、ということです。

わたせ 審美に通じるものがある？

中原 ええ、わたせさんの作品を見ると、たとえば、人物の顔にずっと引かれたたった1本の線でその人の年齢はもちろん、心情や個性までがありありと読みとれます。この表現力は本当にすごいなと。というのは、審美にしても、歯をとにかく真っ白にすればいいというわけではなく、年齢に合った美しい歯の色、その人に合った美しい歯並びというものがあるはずで、では、どうすればその人の魅力を最も際立たせるのかを見極めるのは非常に難しいんです。今日は、わたせさんの話から、そこらへんのヒントが探れないかと期待しています。

わたせ 僕が生徒たちにもいつも言っていることでいうと、基本は観察ですよ。

中原 確かに、芸術家はみなさんが、物を見るとき視点の鋭いし、観察眼が非常に高い傾向があります。

Seizo Watase

- ・1945年、神戸市生まれ。北九州市小倉育ち。早稲田大学法学部卒業。
- ・第33回文藝春秋漫画賞を受賞。
- ・著書に「ハートカクテル」「菜」「ハナドキロード」「HEART COCKTAIL eleven」「菜～ふたたび～」「南の島」など多数。「季刊びあ」の表紙イラスト、「北のライオン」(モーニング)連載中。
- ・イラストレーターとしても、官公庁広報用ポスター、企業広告用イラストを数多く手掛け、精力的に活動。高い評価を得ている。
- (オフィシャルブログ) SEIZO STATION <http://www.seizo-watase.com/>
- (オフィシャルサイト) APPLE FARM <http://apple-farm.co.jp/>

わたせ クリエイトする人たちは物をちゃんと見る力が非常に問われます。たとえば、「窓を開けたら、電線にスズメがとまっていた」という簡単な表現をするときでも、頭の中で想像したのと、本当に窓を開けて電線にとまっているスズメを観察したときとは、表現が明らかに違ってくるものなんです。

中原 クリエーターは想像力が豊かだというイメージがありますが、その基礎には観察があるわけですね。わたせさんのそういう能力は生まれつきのものですか？

わたせ 素養というものがあるかどうかはわからないけれど、絵の勉強を始めたのは比較的早かったですね。うちの家系は医者で、祖父が小倉で眼医者を開業していて、息子、つまり僕の父親を医者にしたかった。だけど、父親は絵を描きたくて、東京の芸大を目指したけど受からなかったの、仕方なく、神戸の関西学院大学に入った。何で神戸かという、父親が大好きだった洋画家の小磯良平さんが住んでいたからなんです。

中原 お父さんは諦めていなかったんですね。

わたせ 祖父は、自分の跡を継いで医者になってくれるだろうとすっかり思い込んでいたみたいですけどね。その陰で父親は、小磯さんのもとに通っていた。それでも結局、父親は画家になれなかったんです。そこで、僕を画家にしようと、幼稚園の年長から、友人の画家に家庭教師をお願いして、僕に絵の勉強をさせた。そのとき徹底的に教わったのが、まさに観察なんです。

中原 そんな小さい子どもの頃に、極めて基本的で根源的なテーマを理解できたわけですよ。

わたせ いえいえ、そのときは、わかってなかったと思いますよ。リンゴ1個を置いて、「これを描け」と先生は言う。描いて見せると、「よくできた。でも、もっとよく見ろ」と言うんですよ。それで来る日も来る日もリンゴを描かされた。数カ月ずっとそれです。子ども心に、なんでこんなことやらせるんだろうと。

中原 それは思いますよね。

わたせ 僕はもっと飛行機とか動物とか描きたいのに、延々とリンゴを描かされるんですよ。もういい加減、嫌気がさしていたある日、やはりリンゴを描いていたら、ふと、窓から差し込んだ光がリンゴに当たっているのに気付いた。その光と影のコントラストをしげしげと眺め、そして、光を表現した絵を描いたら、先生が初めて「うん、よくできた。今度、動物園に連れて行ってあげる」と、やっとリンゴから卒業できたんです。

中原 そのときに、対象そのものを表現することができた、ということですね。

わたせ そうでしょうね。その先生には、小学校一年のときまで2年間教わりましたが、その間ずっと教えてくれたのは、観察すること。本当に徹底して教わりました。

中原 本当に基本的なことなんですね。

とことん対象と向き合ったうえで、 余分なものを削いでシンプルにする

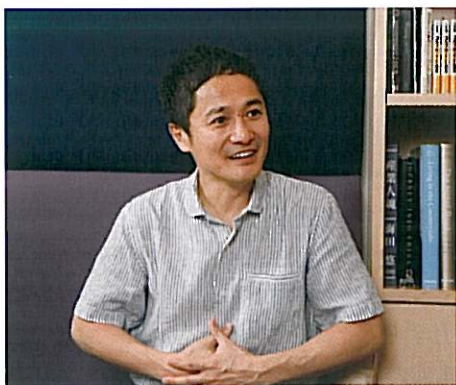
わたせ 意外とみんな、物を観ているようで、実際には観ていないということが非常に多いんです。「リンゴを描け」というと、頭の中のイメージだけで空で描いてしまっているんです。実際に目の前にあるリンゴを観ずに。

中原 既成のイメージがあって、それで創り上げてしまう。

わたせ そう。「リンゴは赤い」というイメージだけで、赤でべたべた塗ってしまう。でも実際によく観察してみると、赤だけではなく、グリーンやブルーが見えたりする。思い込んでいると、そういうものが観えないんです。

中原 それだけ緻密に観察して、物それ自体の本質を捉えながら、でもそれを実際イラストに表現するときには、すっとシンプルな線で表現してしまう。これがまたすごいというか、不思議というか、この秘訣はどこにあるのでしょうか。

わたせ やり方でいうと、僕の場合は、対象をよく観察



して、目に見えない情報まで含めて心にとめたら、その複雑な情報を今度は削いでいく、という消去法のプロセスに入っていくんです。そのお手本は浮世絵ですよ。あの浮世絵のシンプルな表現が、当時、ヨーロッパの印象派に多大な影響を与えたわけですが、それは、対象をとことん観察したうえで、そこから余分なものをどんどん削いでいき、極めてシンプルな表現で、対象の本質をずばり表現していることに気付いたからです。

中原 なるほど、言われてみれば、浮世絵は意外にポップだし、わたせさんの作品に通じるテイストを感じます。

わたせ でも、実際には難しい作業で、いまでも完全にできているわけではないと思います。たとえば、しわ1本入れるのってすごく難しいんですよ。頬のあたりに線を1本ちょっと入れるだけで、20歳代のつもりで描いた人物が突然年をとっちゃうんです。

中原 今回、わたせさんの作品を改めて見返してみましたが、確かに、中高年モデルにされた作品でも、しわが描かれていませんよね。

わたせ それは、とくに商業作品の場合は、中高年を描く場合でも、あえて若々しく描いているという側面もありますけどね。

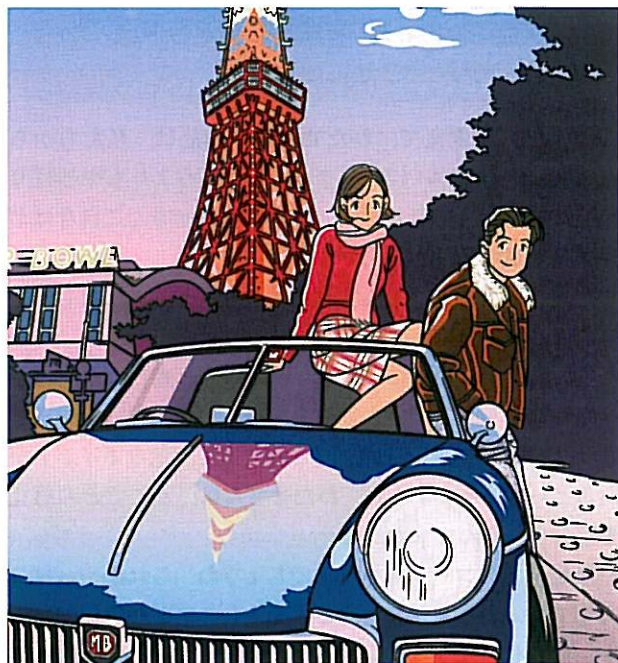
中原 ただ、それでも、ある程度、年齢の表現はできていると思います。しわでないとすれば、年齢の表現のポイントはなんですか。

わたせ 服装、髪形、コミックだったらセリフの表現で変わってきます。

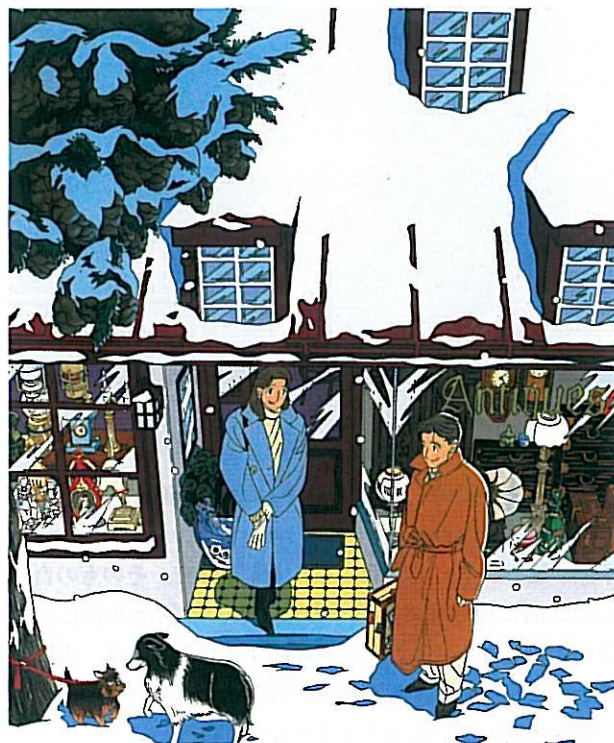
中原 するとそれは、時代性を極めて強く反映することになりますよね。

わたせ おっしゃるとおりです。

中原 たとえば、日曜日の夕方に、「サザエさん」と「ちびまる子ちゃん」というある意味対照的なアニメが続いて放送されていますけど、ちびまる子ちゃんは70年代テイストの懐かしさがあるのに対して、サザエさんは同時代的です。それも、登場人物は変わっていないのです。



東京風景



オリジナルカレンダーより

わたせ だから、風景が変わっていますよね、微妙に、台所に電子レンジが何気なく置かれていたり、ちゃぶ台がいつの間にかテーブルに変わっている。

中原 対象そのものだけではなく、全体を観る、全体から感じるものが結果的に人の心に残る、ということでしょうか。

わたせ そう言えますよね、想像力というのは基本的に、心のストックに実際に見た風景とか感じたことがベースにあるわけです。だから、同じ風景を描くのも、実際に行ってその風景を観ないといひ絵は描けません。それは、自分の目で観るということだけではなく、その場でしか感じられない空気感みたいなものを含めて、全部を肌で感じるということが非常に大切なことだからです。

中原 目に見えないものまで感じると、深いですね。

俯瞰と対象の分解の両方が必要

わたせ 海と砂浜があって、船が一艘浮かんでいるという風景があったときに、実際そこには海と砂浜だけではなく、海の中にも砂浜の中にもたくさん何かがあるし、その手前の林とか草原も風景の一部だし、空気だって無色透明じゃない。全部が混然一体となって初めて美しい風景を作っているんです。砂浜の稜線だけを描けば美しくなるわけではないんです。

中原 いまのお話で、とても感慨深いのは、歯科医の反

省として、ずっと歯のことしか見てなかった時代というのが非常に長かったことです。ひょっとしたら、歯でもなくて、虫歯だけしか見ていなかったと言えるかもしれません。それが、口腔全体の健康や環境に目が向いて、さらに、口元から顔全体の審美にまで広がってきたのが、やっそここ20年の流れです。

わたせ 俯瞰するという流れになってきているわけですね。

中原 ただ、実際にはインターディシプリナリーがずっと言われながら、いまだにできていない。カリオロジー、歯ぐき、歯周病、口腔外科など、基礎を入れればわれわれが習う研究分野って80ぐらいに細分化されている。全部を統合するのは本当に難しいです。

わたせ 僕が家の裏のおじいさんの歯医者に行っていた頃とは時代が全然違っちゃっているんですね。歯科医の治療も歯だけではなく、口全体とか、もしくは身体まで含めて診ないといけないし、下手すると精神状態まで含まれそうですね。

中原 おっしゃるとおりです。精神医学の一分野としての審美歯科医療も重要なテーマです。歯の問題は、親にも言えずに悩んでいたりするし、コンプレックスにもなります。そういった心のケアを考えていかないといけないし、また、心のストレスが原因になってかみ合わせの問題や、ブラキシズムにつながっていくので、精神面から切り込んでいかないと治療できない場合も実際にあります。



人が“おしゃれ”と感じるポイントは 色の組み合わせに秘訣

中原 見方を変えて、わたせさんの作品は、私たちから見ると、「格好いい」とか「きれい」というよりもやっぱり「おしゃれ」だと感じるわけですが、わたせさんご自身はどう思って描かれているんですか。

わたせ それはおっしゃられるとおり、おしゃれなものを描こうと思って描いています。

中原 万人が見ても、「おしゃれだな」と感じるし、わたせさんご自身もそういう気持ちで描かれている。ということは、誰でも「おしゃれだな」と感じる普遍的なポイントがあるということですよね。わたせさんは、どこでその感覚を感じられるんですか。

わたせ 色のコーディネートでしょうね。これがやっぱり大切です。おしゃれというと、モノトーンを連想しがちです。確かに、モノクロは格好いいけれど、最後の頼みみたいところがあって、安易にそこに頼ってはいけないと僕は思っているんです。だから、あくまでも有彩色で表現することにこだわって、やっぱり色で悩むんですけど、それが大切ですよ。

中原 おしゃれな色の取り合わせというのは、なにがしかの理論的な裏付けがあるものですか。

わたせ 理論としては、補色の組み合わせなどのロジック的なものもあります。ただ、それ以上に僕が気をつけているのは、作品を観た人に、どんな色の情報が残るかということです。たとえば、漫画なら、ブルー系の色のシーンをずっと積み重ねて、クライマックスで、オレンジを

わたせ それこそ、患者全体を診ないと正しい治療はできないわけですよね。

中原 まさにそうですね。そういう意味で、そのもの自体を徹底的に観察するというわたせさんの話は非常に感慨深いです。さらに、わたせさんのすごいところは、実際にはそこにはないもの、あるいは、物理的に見られないはずの景色が描かれていることがありますよね。

わたせ それは構図の勉強をすると、ある程度体得できます。表現手段としては非常に効果的なので、映画などでもよく使う手法ですね。『アラビアのロレンス』では砂漠を疾走するロレンスを、『ウエストサイドストーリー』は夜のニューヨークを、『パリ、テキサス』ではテキサスの街をずっと俯瞰している映像が冒頭に流れます。

中原 作品の世界観に観客をぐっと引きずり込むわけですね。

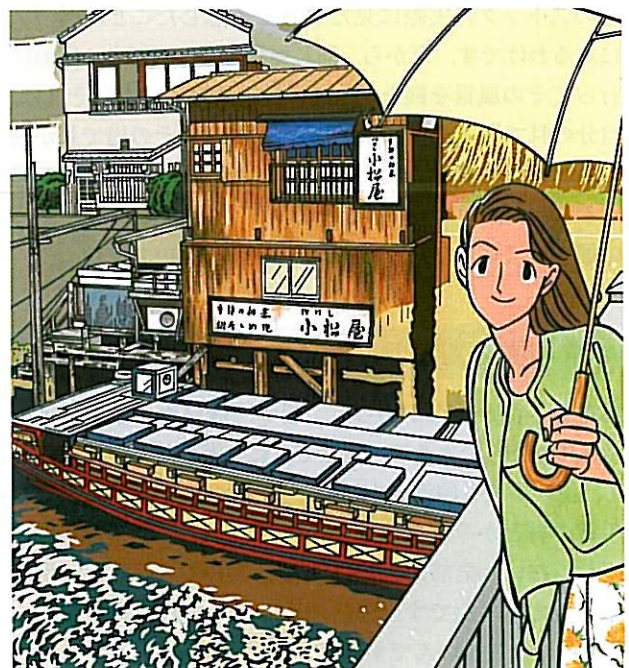
わたせ 映像表現としてはとくにインパクトがあります。ローアングルで有名な小津安二郎監督の作品でも実は俯瞰がよく使われます。『東京物語』で僕が一番好きなシーンがあって、それは、笠智衆と東山千栄子さんが夫婦役で、熱海の旅館に泊まったけど、隣の若者たちが大騒ぎしているので眠れない。その様子を、旅館の廊下から見たローアングルの視点でさんざん見せておいて、次の瞬間場面がぱっと切り替わって夫婦が堤防に2人ポツンという大俯瞰になるんです。

中原 上京して訪ねてきた両親を、うとましく思って熱海の旅館に泊ませたシーンですよね。

わたせ そう。子どもたちから邪険にされた、さみしい老夫婦の心情が染み入るシーンを俯瞰の構図でうまく表現しているわけです。

中原 対象を子細に観察して、細分化して突き詰めることと、ぐっと引いて俯瞰で観て、全体を捉えること、両方が大切だということですね。

わたせ そうですね。俯瞰ばかりでは、何を表現したいのかさっぱりわからないし、子細に分析していく視点がないと対象の本質は見えない。両方とも必要です。



東京風景



ぱっと出す。そうすると、オレンジという色の情報をその人は持って読み終えることになるんです。それは意図的にやっていますね。

中原 それは感覚的なものですよ。

わたせ 感覚もあります。でも、やはり、情報を得ることも必要です。今年は何んな色が流行っているのかとか、洋服は何んな形が先端かなど、パリコレとかミラノコレクションとか、やっぱり一通り観ていますよ。

中原 それこそ観察しているわけですよ。

わたせ 感性というのは突き詰めれば観測だし、観測したときの感激です。感激をどれだけたくさん心に残しているかということが一番大切だと思います。自分が感激しないものを描いて、人に感激させるのは不可能です。

中原 たくさんいろんな美しいものに触れて、感動する体験をたくさんストックしておくよ。

わたせ そうですね。だから、机にかじりついて描いているだけで、いい作品を描くことはできません。僕も、いろんな風景を実際に自分の目で観に行くし、合唱団に入ってみんなとコーラスを歌うのも、心の肥やしになるからです。

中原 わたせさんは、ずっと恋をすることが大切だ、という価値観を提示されています。それも、心を豊かにするために、とても大事なことですよ。

わたせ 心を動かされる体験が非常に大事なんです。だから、恋愛といっても、その対象は異性でなくてもいい。花だったり、歌だったり、絵だったりでもいいんです。

中原 心を打ち震わせるほどの感動のストックを自分の中に蓄えていって、それを表現する。ただ、表現できるだけの才能を持ち合わせていない凡人にとっては、それはなかなか難しいことではないかなと思ってしまうのですが。

わたせ それは、継続ですよ。色彩の魔術師と言われたアンリ・マティスは、晩年、その技巧が極限にまで洗練され、複雑な色彩表現はなくなって逆にどんどんシンプルになっていって、最後は線と明暗だけの表現にたどり着くんですけど、そのマティスは、朝起きてアトリエに入ったら、毎日、卵のスケッチをするのを日課としており、画家として名声を得てからも、死ぬまで一日も休んだことはなかったそうです。誰でもが、そんな「マティスの卵」を持っているといいですよ。